

梅雨 モンゴルでは炎天

いろいろはつぶり

梅雨入りした。梅雨は毎年訪れ、沖縄・奄美地方から始まるが東北地方まで、北海道では現れず、むしろ乾燥したさわやかな天候が続く。札幌管区気象台に勤務の折、大通公園で目にしたピンクのライラックと香りが懐かしい。

実は、梅雨は日本列島だけに留まらず、東南アジア一帯に現れる季節的現象だ。中国では同じく梅雨と書いて「メイユ」と呼ばれる。この現象は最初、モンスーンと呼ばれるインド洋からの湿った南西の季節風として、インドシナ半島付近を吹き上がる。さらに、湿った風が中国南部に進んで、大陸の乾燥した気団にぶつかると、

境目に「梅雨前線」ができる。前線が徐々に北上し、東に延びて西日本に達すると、梅雨入り。

梅雨前線は、日本付近では南の「小笠原高気圧」から吹き出す湿った南西気流と、北海道沖の「オホーツク海高気圧」から流れ出す冷たい北東気流との押し合いの場となる。活発になると、集中豪雨も起きるが、南に離ればさわやかに晴れる。日本海に北上すれば蒸し暑い天気になる。

かつて、モンゴルのウランバートルにある気象庁を、JICA

(国際協力機構)の無償技術援助プログラムで何度も訪問し、気象学を講義した。日本と異なると梅雨はなく、その時期は連日40度に達するような炎天。人々は傘を持たず、にわか雨をむしろ楽しんでるよう。しかし、雨の少ないモンゴル、大規模な小麦畑の管理などに雨の予測は重要だ。

6月21日は「夏至」、北半球では太陽が最も高く巡り、昼間も長くなる。水戸での日照時間は約14時間40分だが、ウランバートルでは何と約16時間。7月に入ると人々は「ナーダム」と呼ばれる祭典で、「モンゴル相撲」や少年たちが30キもの大草原をひた走る裸馬レースに胸をときめかせる。

古川 武彦 元気象庁予報課長

執筆者紹介



1940年生まれ。滋賀県出身、鹿嶋市在住、理学博士。61年に気象庁研修所高等部(現・気象大学校)卒業。予報課長、札幌管区気象台長など歴任。退官後の2003年に気象研究や啓発に取り組む活動の舞台「気象コンパス」を立ち上げた。